



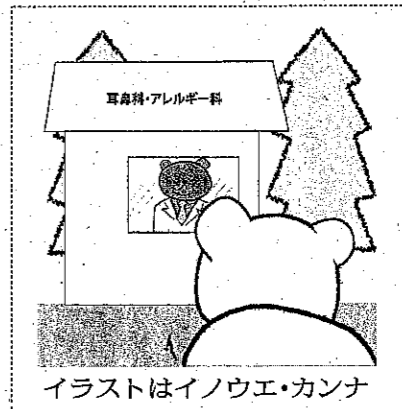
鼻炎最前線

後藤 謙

アレルギー性鼻炎は非常に不快ですが、ぜんそくや関節リウマチなど他のアレルギー疾患に比べると生命の危機に至ることはほとんどありません。スギやヒノキの花粉アレルギーのように一定の季節に多くの患者が発生すると、病院を受診しても長い時間待たされるのが珍しくありません。

このため、多くの患者は薬局やドラッグストアで自由で買える市販薬(OTC)で対処しているのが現実です。長い間、花粉症のOTCは、症状を抑える時間が

市販薬での対処



イラストはイノウエ・カナ

比較短く、眠気などの副作用を伴うことも少なくありませんでした。今でも花

一度は専門医の診断を

粉症用」として販売される薬の多くは、ピーク時の症状緩和を目的としているので、運転前の服用などは控えるよう添付文書で指示されています。

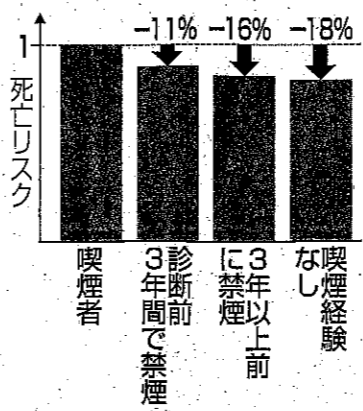
一方、近年発売された「アレルギー性鼻炎治療薬」は、医師が処方する薬とほぼ同じ成分です。こちらは眠気などの副作用は少なく、効果も一定以上持続します。この薬は必ず薬剤師の説明を受けてから購入する必要があり、1週間程度服用しないと効果が出てきません。しかし、効果が出てくれば毎日服用し続けることで症状を抑えていくことが期待できま

それでも、アレルギー性鼻炎の症状は原因物質の飛散度合いや体調によって軽くなったり、重くなったりします。また原因物質が特定できていないと、周囲から遠ざけるなどの対策も難しくなります。OTCに頼り切っていると、このような変化や対策を取ることが難しくなります。理想を言えば、一度は耳鼻科やアレルギー科の専門医の診断を受けた方がよいでしょう。

そして、原因物質やアレルギーの強弱を知り、どの程度の薬が適切か確認した上で、時間が無い場合はOTCで対応し、症状に変化があれば医師の診察を受ける、という対応をお勧めします。(日本医科大学多摩永山病院耳鼻咽喉科部長)

がん診断後でも禁煙に効果

がん診断されたときの喫煙・禁煙状況と死亡リスク



(大阪府立成人病センター・田淵貴大医師らのチームによる)

大阪府立成人病センター分析

がんが診断されてからでも禁煙すれば、たばこを吸い続けた場合に比べ、より長く生きられる可能性がある。そんな研究結果を大阪府立成人病センターの田淵貴大医師たちのチームが国際医学誌に発表した。1985年から2009年に同センターで、がんが診断された20~79歳の約3万人を最大10年にわたって追跡し、喫煙と死亡リスクの関連を

分析した。その結果、同センターでがんが診断された時点で喫煙していた人に比べ、診断前の3年間で禁煙した人の余命は1年ほど長いことが分かった。

その85%は診断前の1年間で禁煙していた。同センターの場合、他の医療機関でがんが診断されてから来る人がほとんどだ。そのため、この余命の差は、最初にがんが診断された後に喫煙を続けた人と禁煙した人を比べた結果にほぼ等しいとみられる。

死亡リスクは喫煙者に比べ、11%低かった。全く喫煙経験のない人は18%、診断の3年以上前に禁煙した人は16%、それそれ低くなっていた。また、禁煙に伴う死亡リスクの低下は、がんの部位によらないと考えられるという。

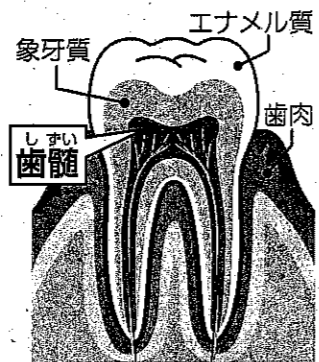
田淵さんは「禁煙はがん患者にとって抗がん剤並みの効果があるといえる。がん治療の効果を上げるため禁煙は必須だが、徹底されていない場合もある。全ての患者に禁煙支援をすることが重要だ」と話している。

歯髄

再生医療へ個人向け保管進む

歯髄とは、歯の中にある軟らかい組織のこと。栄養を運ぶ血管や、痛みを感じる神経が入っているほか、さまざまな組織のもとになる「幹細胞」が含まれる。乳歯や親知らず、矯正治療で抜いた歯から取り出しが可能だ。

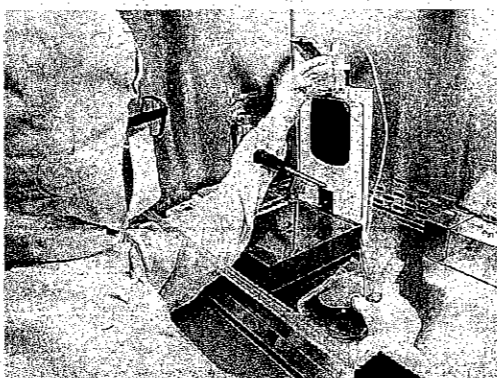
日本歯科大(東京都千代田区)とセントラルクリニック(港区)



は昨年8月、歯髄細胞バンクを発売させた。大学が関わる初の「民間バンク」の試みだ。担当する中原貴教授は「(白血病などの治療に使われる)骨髄に比べ、歯髄の細胞は同じ期間で3~4倍に増やす」と強調する。保管希望者は協力先の歯科医院で抜歯。同バンクで歯髄を採取し、培養して増やした細胞を液体窒素を使い凍結保存する。臨床研究中の歯の治療のほか、脊髄損傷や脳梗塞、肝硬変などを治療する研究が同大や関係機関で進められている。

費用は初年度5万円、2年目以

臍帯血の民間バンクも



臍帯血から必要な細胞を分離、抽出する技術員(システムセル研究所提供)

降は年2万円。既に40人が細胞を保管した。中原教授は「筋ジストロフィーなどの小児患者数人も乳歯の細胞を預け、治療発展に望みを託しています」と話す。将来のリスクに備えた「保険」

⑤歯髄の中にあり、一般に「歯の神経」と呼ばれる歯髄に含まれている貴重な幹細胞は、増殖能力が高い

⑥顕微鏡で観察された歯髄細胞

⑦歯の中から「セット」で取り出された歯髄

(写真はいずれも日本歯科大の中原貴教授提供)

九州大や岐阜大などと再生医療の研究を進め、脊髄損傷は臨床段階。大友宏二社長は「患者の手足の感覚が徐々に回復してきています」と、今後を期待する。白血球などの治療に用いられる「臍帯血」でも近年、個人用の保管は増えている。臍帯血の場合、第三者向けの寄付を受け付ける「公的バンク」があるが、民間バンク最大手のシステムセル研究所(港区)では、初期費用が21万円(10年の保管料込み)かかる保管の希望者が年4000件ペースで増加しているという。

臍帯血は出産時のへその緒や胎盤にある血液。その中に含まれる幹細胞を脳性まひや脊髄損傷などの再生医療に利用する研究が進む。同社の佐藤英明細胞技術センター長は「将来の再生医療に期待が高まっている表れ」と背景を分析する。

再生医療には未知数な面もある。こうした民間バンクに関心がある人は、信頼する医師に相談するなど情報を十分集めて判断することが大切だ。

本人や家族が難病、大けがを治療するときに役立てたい。駄目になった組織や臓器を元通りにする再生医療の研究が急速に進む中、抜けた歯の「歯髄」を将来の治療で使えるようにするため、個人用に保管を依頼する動きがじわりと広がっている。

